

山形・大楯遺跡

おおだて

- 1 所在地 山形県飽海郡遊佐町大字小原田字大楯・大槻
- 2 調査期間 一九八七年(昭62) 四月～八月
- 3 発掘機関 山形県教育委員会
- 4 調査担当者 伊藤邦弘
- 5 遺跡の種類 城館跡
- 6 遺跡の年代 鎌倉時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

大楯遺跡は、庄内平野の北端、遊佐町大字小原田字大楯・大槻を中心とした水田中に位置する。標高は約一六mを測る。



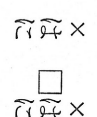
(吹浦)

発掘調査は県営圃場整備事業によるものである。検出された遺構は、掘立柱建物・柵木列(SA10)・井戸・土壇・溝等である。柵木列は一九八六年度の分布調査で検出された箇所を含むと、東西約三〇m、南北約二五mに及び、さらに

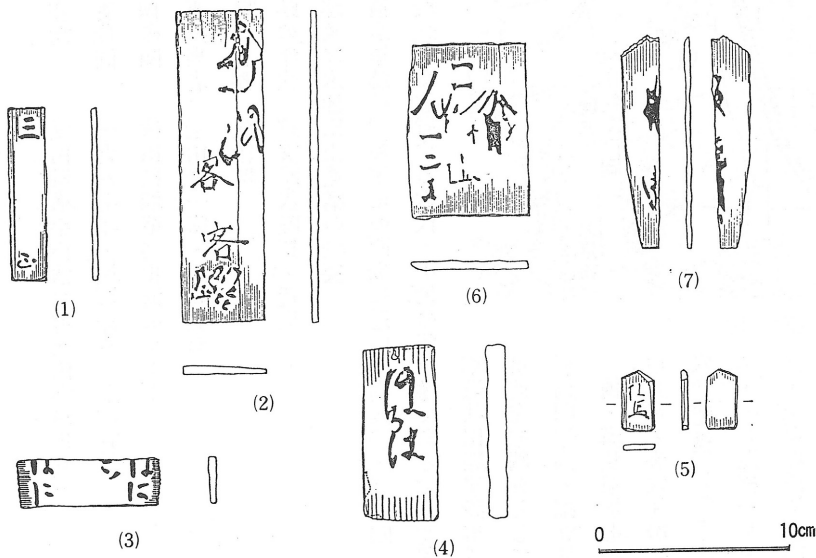
西へ続くものと考えられる。出土した木簡は、溝SD10一から四点、土壇SK2六九から一点、溝SD三八三から一点、柱穴から一点の計七点である。それぞれの遺構からは、中世陶器(珠洲系陶器)や木製品(箸・櫛等)が出土している。

本遺跡の性格としては、安部親任の『筆濃余理』に記述された遊佐殿の居館、あるいは、文治五年(一一八九)源頼朝の藤原泰衡征伐で投降し、本領を安堵された川北冠者忠衡が居館を構えた地域と推定される。

8 木簡の積文・内容

- (1) 「三」
93×19.5×3 011
- (2) 「客 客」
169×44×3.5 011
- (3) 
(25)×7.5×3 081
- (4) 「(穿孔)ほろほ」
95×39×10 011
- (5) 「桂馬」
34×17.5×3 061

木簡の形態は短冊形が多い。(2)は文字の他に猪・兎と下方に猿と考えられる三匹の動物が横位に描かれ、文字は兎と猿の間に書かれている。絵暦の可能性がある。(4)は「保呂羽」と考え、東ねた矢羽



に付けた付札と思われる。(5)は将棋の駒である。本県で歩以外の駒
 が出土した初例となる。他の二点は墨痕が残っているが、文字か絵
 か判然としない。

(伊藤邦弘)